

サツマイモ立枯病抵抗性の新系統「サツマイモ徳島1号」

誌名	徳島県立農林水産総合技術支援センター農業研究所研究報告 = Bulletin of Tokushima Agriculture, Forestry, and Fisheries Technology Support Center Agricultural Research Institute
ISSN	18809960
著者	川村, 泰史 新居, 宏延 吉原, 均 吉村, 健二 井内, 美砂 後藤, 昭文 隔山, 普宣 小川, 純一
巻/号	5号
掲載ページ	p. 7-15
発行年月	2008年12月

〔 徳島農研報 No.5 〕
〔 7～15 2008 〕

サツマイモ立枯病抵抗性の新系統 「サツマイモ徳島1号」

川村泰史*・新居宏延**・吉原 均***・吉村健二***・
井内美砂****・後藤昭文**・隔山普宣***・小川純一*****

A new sweetpotato (*Ipomoea batatas* L.) cultivar
'SATUMAIMOTOKUSHIMAICHIGOU'
resistance to sweet potato root rot disease

Hirofumi KAWAMURA*, Hironobu NII**, Hitoshi YOSHIHARA***, Kenji YOSHIMURA***,
Misa IUCHI****, Akifumi GOTO**, Hironobu KAKUYAMA*** and Junichi OGAWA*****

要 約

川村泰史・新居宏延・吉原 均・吉村健二・井内美砂・後藤昭文・隔山普宣・小川純一
(2008)：サツマイモ立枯病抵抗性の新系統「サツマイモ徳島1号」. 徳島農研報(5)：7～15
砂地畑のマルチ栽培に適し、立枯病抵抗性があり、外観品質に優れ、良食味で多収な青
果用サツマイモ品種を育成するため、「九州112号」を種子親、「高系14号」を花粉親とした
交配の後代から選抜し「サツマイモ徳島1号」とした。

上いも重が高く、早掘適性、遅植適性、耐肥性が高い特性がある。また、立枯病、ネコ
ブセンチュウ、ネグサレセンチュウにも抵抗性があり、立枯病が発生している連作地での
栽培が期待される。

キーワード：サツマイモ、立枯病抵抗性、早掘適性、晩植適性、耐肥性

はじめに

本県の吉野川下流域の砂地畑は、以前から「高系14号」の芽変異系統から選抜した系統である「なると金時」を栽培し、青果用サツマイモの産地となっている。1973年に鳴門市とその周辺部の砂地畑で栽培されているサツマイモの塊根に黒斑症状が発生した。1986年に鈴木ら¹⁾により放線菌 *Streptomyces ipomoeae* によるサツマイモ立枯病として報告された。その後、1991年に貞野ら²⁾は現地が発生している黒斑症状部から放線菌 *Streptomyces ipomoeae* を分離することで病原性を確認し、立枯病の発生を明らかにした。本県ではこの病害に対する防除対

策として福西のクロルピクリン剤のマルチ畦内消毒^{1),2)}や金磯らによる各種資材の活用^{6,7,8,9)}や土壌水分に関して¹⁰⁾クロルピクリン剤の処理方法を中心に取り組んできた。また、サツマイモの立枯病抵抗性系統を効率的に選抜するために井内ら⁴⁾は簡易検定法の開発を行った。

筆者らは本県砂地畑で問題となっているサツマイモ立枯病に抵抗性のある品種を育成するために1994年までにサツマイモの多くの系統を収集した。1995年からキダチアサガオを台木として接木を行い、サツマイモを開花、交配して種子を得た。その後、実生個体をクロルピクリン剤を処理していない圃場で一次選抜を行い、生産性・品質の調査、立枯病激発圃場での耐病性の調査を行い、

* 現 農業大学校 ** 現 高度専門技術支援担当 *** 現 東部農林水産局 **** 現 西部総合県民局農林水産部
***** 現 とくしまブランド戦略課

立枯病抵抗性が高く、砂地畑で品質の優れた系統を育成し、「サツマイモ徳島1号」と命名した。よって、その来歴、育成経過、特性等について取りまとめたので報告する。

試験方法

1 来歴

「サツマイモ徳島1号」(以下「徳島1号」と略す)は、「九州112号」を種子親、「なると金時」(高系14号)の芽状変異からの選抜系統、以下「高系14号」)を花粉親とした交配の後代(交配番号9610-10)から、立枯病抵抗性、外観品質、食味、収量性に着目して選抜した系統である。

交配は1996年に徳島県立農業試験場ハウス(徳島県名西郡石井町石井)で実施した。1997年に交配種子を播種し、実生個体選抜試験を実施以降、系統選抜試験、耐病性(立枯病抵抗性)試験、定植時期試験、耐肥性試験を実施した。

2000年以降、「徳系1」として鳴門市農業センター等で現地適応性試験に供した。

1) 実生個体選抜試験

育苗トレイ・培土：ビーポット(16穴)・与作N-150
播種：1997年2月28日

定植時の選抜方法：

定植時に生育不良、つる性、根が白い個体を淘汰し、生育良好で根が濃赤紫色のものを選抜する。

植付月日：6月2日

収穫月日：10月1日

栽培密度(cm)：畦幅75cm, 株間40cm, 1条植え
施肥量(窒素：リン酸：加里)(kg/a) = 0.4:3.7:1.7

収穫時の選抜方法：

収穫時にいもの形状、外観品質、皮色、肉色の良い個体を選抜し、選抜した個体を蒸しいもにして肉色、食味を調査した。

2) 系統選抜試験

耕種概要については第1表の(1)のとおりである。

3) 耐病性試験

耕種概要については第1表の(2)のとおりである。
クロロピクリン剤は処理せず、乾燥しやすい条件の圃場で実施した。

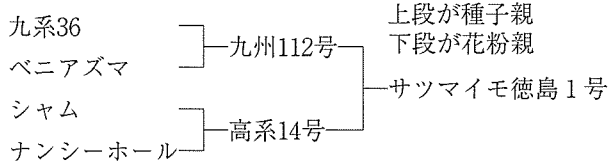
4) 定植時期試験

耕種概要については第1表の(3)のとおりである。

5) 耐肥性試験

耕種概要については第1表の(3)のとおりである。

2 系譜



交配：1996年	徳島県立農業試験場育種科
実生以降：1997年～2000年	徳島県立農業試験場育種科
2001年～2004年	徳島県立農林水産総合技術センター農業研究所 栽培育種担当

系統番号：9610-10

2000年より「サツマイモ徳系1」

2004年より「サツマイモ徳島1号」

試験結果

1 形態的特性

2003年に調査した「サツマイモ徳島1号」の種苗法による品種特性分類調査による特性概要については第2表に示した。また、第1図と第2図に「サツマイモ徳島1号」の地上部と地下部の状況を写真で示した。

圃場における草型は「匍匐型」、卷つる性は「無」、頂葉色は「褐」で葉色は「緑」、葉形は「波・葉状心臟形」である。茎及び節の着色はいずれも「中」、葉脈の着色は「無」で、蜜腺の着色は「無」である。茎の太さは「中」、長さは「やや短」である。

生育特性調査について第3表-1に示した。

諸梗の長さは「短」、強さは「中」である。いもの形状は「長紡錘形」で形状整否及び大小整否はいずれも「整」である。条溝、裂開及び皮脈は「無」で外観は「やや上」である。いもの皮色は「濃赤紫」、肉色は「淡黄」でうん及びカロチンは「無」である。対照品種である「高系14号」、「ベニアズマ」と比較して頂葉色が紫褐色であることにより容易に識別可能である。また、いもについては揃いが良くてやや小さめ、濃赤紫色がやや濃い目に出てくるのが特徴である。

2 生態的特性

萌芽性の調査結果について第3表-2に示した。

萌芽の多少は「中」、萌芽の揃いは「やや整」、萌芽及び伸長の遅速は「中」、萌芽の多少は「中」でこれらを総合して萌芽性は「中」である。対照品種である「高系14号」、「ベニアズマ」と比較して芽数が多く、つる長も長く萌芽性は良かった。

それぞれの試験の収穫物調査特性について第4表に示した。

育成地における上いも重は、「ベニアズマ」より9%上回り、「高系14号」では50%上回った。株当たり上いも数は「ベニアズマ」の約1.4倍、「高系14号」の約1.7倍で上いも1個重はやや少ない。切干歩合は「ベニアズマ」,「高系14号」よりやや低く、約32%である。つる重は「ベニアズマ」の約53%,「高系14号」の約139%と両者の中間である。現地適応性試験を実施した鳴門市等の圃場においても同様の傾向を示した。

早掘適性・晩植適性調査成績については第5表に示した。

「徳島1号」の上いも重は5月上旬から6月上旬にかけて177~280kg/aと「ベニアズマ」の100~246kg/a,「高系14号」の44~198kg/aと比較して安定した収量性を示した。このことから、遅植適性が高い品種であった。

耐肥性調査成績については第6表に示した。

「徳島1号」の上いも重は標準から極多肥で252~319kg/aで極多肥の区で最も上いも重が高くなった。「ベニアズマ」が246~306kg/aであったのに対して「高系14号」は120~164kg/aで極多肥の区で最も上いも重が低くなった。「高系14号」では多肥による減収傾向が見られたが、他の2品種では判然としなかったことから、「徳島1号」は多肥によっても減収はしなかった。

病害抵抗性成績については第7表に示した。

立枯病には「やや強」、ネコブセンチュウには「やや強」、ネグサレセンチュウには「やや強」の抵抗性を示す。また、貯蔵性は「ベニアズマ」より優れ「高系14号」と同様「易」である。尚、立枯病については平成10年度~平成16年度の耐病性試験の数値と達観により判断した。

第1表 耕種概要 (1998~2004年)

(1) 収穫物調査特性, 品質, 生育特性 (マルチ標準栽培)

試験年度	栽培密度 (cm)	施肥量(窒素: 磷酸: 加里) (kg/a)	株数	区制	植付月日	収穫月日
1998	75×40	0.9:3.1:3.0	7	1	6月12日	10月12日
1999	75×40	0.5:3.5:2.4	7	2	6月8日	10月14日
2000	75×40	0.8:4.1:2.7	7	2	6月2日	9月27日
2001	75×45	0.5:3.0:1.8	7	2	5月31日	10月2日
2002	75×45	0.7:3.5:2.2	7	2	5月16日	10月2日
2003	75×45	0.9:4.0:3.0	7	1	5月29日	10月8日
2004	75×45	0.8:2.9:2.7	7	3	5月17日	10月4日

(2) 病害抵抗性 (立枯病激発圃場, マルチ標準栽培)

試験年度	栽培密度 (cm)	施肥量(窒素: 磷酸: 加里) (kg/a)	株数	区制	植付月日	収穫月日
1998	75×40	0.9:3.1:3.0	7	1	6月11日	10月20日
1999	75×33	0.5:3.5:2.4	15	1	6月28日	10月14日
2000	75×33	0.8:4.1:2.7	10	1	6月19日	10月24日
2001	75×35	0.5:3.0:1.8	7	1	5月31日	10月3日
2002	75×30	0.7:3.5:2.2	14	1	4月24日	9月12日
2003	75×45	0.8:3.2:2.6	7	1	6月4日	10月16日
2004	75×45	0.8:2.9:2.7	7	1	6月4日	10月14日

(3) 早掘適性・晩植適性・耐肥性 (耐肥性については5月17日植付)

試験年度	栽培密度 (cm)	施肥量(窒素: 磷酸: 加里) (kg/a)	株数	区制	植付月日	収穫月日
2004	75×45	0.8:2.9:2.7	7	3	5月7日	9月30日
					5月17日	10月4日
					5月27日	10月14日
					6月4日	10月21日
2004	75×45	標準 0.8:2.9:2.7	7	3	5月17日	10月4日
		多肥 1.0:3.3:3.3	7	3		
		極多肥 1.2:3.8:3.9	7	3		

第2表 特性概要

重要な形質	新系統の特性値									備考 測定値等	対照品種の特性値		
	01	02	03	04	05	06	07	08	09		(高系14号)	(ベニアズマ)	
草型	立型		叢生型	ヤヤ 匍匐型	匍匐型	極匍匐型					5	4	5
草勢			弱		中		強	極強			5	5	6
卷つる性	無		弱		中		強				1	1	1
草高			低		中		高				5	5	5
茎色	無	微	少		中		多				5	1	5
節色	無	微	少		中		多				5	1	5
茎の太さ			細		中		太				5	5	5
茎長			短	ヤヤ 短	中		長				4	5	6
分枝数			少		中		多				5	6	5
節間長			短		中		長				5	5	5
茎の毛茸	無	微	少		中		多				3	3	5
頂葉色(1) (最優性色)	淡緑	緑	濃緑	黄緑	淡褐	褐	淡紫	紫	紫褐		6	2	1
頂葉色(2) (副次的色)	無	淡褐	褐	紫褐	淡紫	紫	その他				6	1	1
葉色(最優性色)	淡黄緑	黄緑	淡緑	緑	深緑	暗緑	淡紫褐	淡褐			4	4	4
葉色(副次的色)	無	淡褐	褐	紫褐	淡紫	紫	その他				1	1	1
葉形	心臓形	波・歯状心臓形	三角形	波・歯状三角形	単欠刻浅裂	波・歯状単欠刻浅裂	単欠刻深裂	複欠刻	多欠刻		2	2	1
葉の大小			小		中		大				5	5	5
葉脈色	無	微	少		中		多		その他		1	1	5
蜜腺色	無	微	少		中		多				1	1	7
葉柄長			短		中		長				5	5	5
葉柄の太さ			細		中		太				5	5	6
諸梗の長さ			短		中		長				3	3	5
諸梗の強さ			弱		中		強				5	5	5
結露の位置			浅		中		深				3	3	3
掘取りの難易			易		中		難				3	3	3
いもの形状(1)	扁平形	球形	短紡錘形	紡錘形	長紡錘形	円筒形	塊形				5	4	5
いもの形状(2)			肩張り		中		下膨れ				5	5	5
いもの形状整否			不整		中		整				7	6	6
いもの大小			小		中		大				5	6	6
いもの大小整否			不整		中	ヤヤ 整	整				7	6	6
いもの皮色 (基本色)		白	黄	褐	橙	紅	赤	紫	その他		7	7	7
いもの皮色 (補助色)	無	白	黄	褐	橙	紅	赤	紫	その他		8	6	8

重要な形質	新系統の特性値									備考 測定値等	対照品種の特性値	
	01	02	03	04	05	06	07	08	09		(高系14号)	(ベニアズマ)
いもの皮色 (濃淡)	極淡		淡		中		濃		極濃	7	5	7
いもの皮色 (分布)	均一	不均一	両端帯紅	全体帯紅						1	1	1
いもの肉色	白	淡黄白	黄白	淡黄	黄	淡橙	橙	紫	濃紫	4	3	5
いもの量の多少	無	微	少		中		多		極多	1	1	1
いもの目の深淺			浅		中		深			5	5	5
いもの条溝	無	微	少		中		多			1	3	1
いもの皮脈	無	微	少		中		多			1	1	2
いもの外皮の粗滑			滑		中		粗			5	5	5
いもの外觀			下		中	やや上	上			6	5	6
いもの圃場萌芽	無	微	少		中		多			1	1	1
蒸しいもの肉質			粘質	やや粘質	中	やや粉質	粉質			6	5	6
蒸しいもの繊維			少		中		多			3	1	2
蒸しいもの肉色	白	灰白	淡黄白	黄白	淡黄	黄	灰黄	淡橙	橙	5	5	6
露地開花性	無	微	少		中		多			1	1	2
萌芽の遅速			早	やや早	中		遅			5	6	6
萌芽揃の整否			不整		中	やや整	整			6	4	4
萌芽伸長の遅速			早	やや早	中		遅			5	5	5
萌芽の多少			少		中		多			5	5	5
萌芽性			不良		中		良			5	5	5
苗重			軽		中	やや重	重			5	5	6
晩植適性			低		中	やや高				6	4	6
早掘適性			低		中	やや高	高			6	6	6
耐肥性			低		中	やや高	高			6	4	6
a 当たりつる重			少		中	やや多	多			6	5	7
1株当たり 上いも個数			少		中	やや多	多			6	5	4
a 当たり上いも重			少		中	やや多	多			6	5	4
上いも重歩合			低		中	やや高	高			6	5	4
貯蔵性			易		中		難			3	3	7
カロチンの多少	無	微	少		中		多			1	1	1
切干歩合			低		中		高			5	5	6
食味			下		中	やや上	上			6	6	6
立ち枯れ病抵抗性			弱		中	やや強	強			6	3	6
ネコブセンチュウ 抵抗性			弱		中	やや強	強			6	ネコブセンチュウ抵抗性およびネグサレセンチュウ抵抗性については平成16年度に独立行政法人九州沖縄農業研究センター畑作研究部サツマイモ育種研究室にて検定。	
ネグサレ センチュウ抵抗性			弱		中	やや強	強		6			

注) 品種登録の特性表を参考に作成



第1図 「サツマイモ徳島1号」の地上部 (徳島県立農林水産総合技術センター農業研究所で2004年7月20日撮影)



第2図 「サツマイモ徳島1号」の地下部 (徳島県立農林水産総合技術センター農業研究所で2003年11月4日撮影)

3 品質特性

品質調査成績については第8表に示した。

蒸しいものの肉色は「淡黄」、肉質は「やや粉」、繊維の多少は「少」で、食味は「ベニアズマ」、「高系14号」と同様「やや上」である。

考 察

本県では吉野川下流域に位置する鳴門市、板野郡を中心に分布する砂地畑に200年ほど前からサツマイモの栽培が導入された。

品種としては昭和31年から「高系14号」の導入を始め、鳴門市農業センターが中心となって芽状変異から表皮の赤い系統の選抜を行い、昭和53年頃から「なると金時」として試作を繰り返し、表皮の赤い系統が農家へ普及していった。現在ではほとんどが「なると金時」のウイルスフリー苗を使つての生産が行われている。

第3表-1 生育特性調査成績その1 (2003年)

特性名	品種・系統名		
	徳島1号	ベニアズマ	高系14号
茎の太さ (mm)	5.3	6.2	4.5
茎長 (cm)	101	248	156
分枝数	12	10	14
節間長 (cm)	2.8	4.7	3.9
つる重 (g)	452	684	407
葉柄長 (cm)	15.4	16.9	14.3
葉柄の太さ (mm)	4.2	5.0	3.6
しょ梗長 (cm)	3.7	7.2	2.9
しょ梗の強さ	中	中	中

注) 10月8日調査。7株の平均値、茎の太さは最も長い茎の展開した葉から下の葉の第9節から第10節の間の中央長径を測定、茎長は最も長いものを測定、節間長については最も長い茎の展開した葉から第9節と第10節の間を測定。葉柄長・葉柄の太さについては最も長い茎の展開した葉から下の第10節の葉を測定。しょ梗長は地上部から最初のいもまでの長さを測定。

第3表-2 生育特性調査成績その2 (2004年)

特性名	品種・系統名			
	徳島1号	ベニアズマ	高系14号	
萌芽状況	芽数	9.3	6.8	6.9
	つる長(cm)	12.0	11.1	8.3
つる重(g)		23.0	27.6	22.8

注) 種いもの植え付け：3月2日、栽植密度25cm 間隔で50cm 長の溝に種いも2~3個植え付け
ハウス黒マルチ栽培、施肥量 (kg/a) 窒素：リン酸：加里＝2.0：2.0：2.0
調査方法
芽 数：4月15日に5つの溝に植え付けた種いもからの溝当たりの平均値
つる長：4月15日の萌芽状況を調査した全ての平均値
つる重：6月2日に25cmの長さに切断したつる重を20本調査した平均値

第4表 収穫物調査特性 (1998~2004年)

特性名	試験年度	品種・系統名		
		徳島1号	ベニアズマ	高系14号
上いも重 (kg/a)	1998	293	248	134
	1999	353	323	330
	2000	234	352	129
	2001	168	241	102
	2002	291	39	181
	2003	257	270	210
	2004	280	246	164
	平均	268	246	179
同上対標準比(%)	1998	219	185	100
	1999	107	98	100
	2000	181	273	100
	2001	165	236	100
	2002	161	22	100
	2003	122	129	100
	2004	171	150	100
	平均	150	137	100
上いも歩合(%)	1998	80	53	84
	1999	90	64	93
	2000	90	79	46
	2001	87	79	80
	2002	92	22	72
	2003	89	81	72
	2004	88	70	72
	平均	88	64	74
株当り上いも個数	1998	-	-	-
	1999	4.9	3.2	5.3
	2000	4.5	6.4	2.6
	2001	4.1	3.5	1.9
	2002	7.1	1.3	2.9
	2003	5.6	5.3	4.1
	2004	7.8	4.2	3.8
	平均	5.7	4.0	3.4
上いも1個重(g)	1998	-	-	-
	1999	215	307	186
	2000	158	164	151
	2001	140	235	179
	2002	138	100	214
	2003	155	172	171
	2004	108	174	129
	平均	152	192	172
切干歩合(%)	2003	31.8	35.3	33.4
	1998	-	-	-
	1999	234	460	253
	2000	293	463	223
	2001	323	646	127
	2002	187	311	139
	2003	134	203	121
	2004	239	556	148
平均	235	440	169	

注) 標準を「高系14号」とした。

しかし、「高系14号」は「徳島1号」と比較して、筆者ら^{3,11,12)}の報告にあるように立枯病に弱く、圃場での収穫が皆無になることも見られた。サツマイモ立枯病の防除に関してはクロルピクリン剤による土壌消毒が卓越した効果を示し、他の薬剤の効果は低いかほとんど認められないとされている⁷⁾。

砂地畑では、連作で生育と品質が低下を防止するため、3～5年ごとに粗粒質の海砂を客土する「手入れ砂」処理が行われてきた。しかし、1978年に採取禁止措置が出てからは、最も良質とされる本県の沿岸の海砂の入手が困難となり、土壌改良も難しくなっている。そのため、砂地畑土壌の適正粒径組成や本県の砂地畑土壌の理科学的の実態を把握し、砂地畑個々の土壌条件に応じた対策を講ずるための研究もされてきた^{5,13)}。

手入れ砂による土壌改良が定期的に行えないことから、

本県の生産現場においては立枯病発生に対してクロルピクリン剤等を用いての対策が行われることとなり、その有効な利用方法について研究が進んできた^{6,7,8,9,10)}。しかし、住宅地周辺ではクロルピクリン剤の刺激臭等の問題がしばしば発生し、これに代わる農薬を使った防除対策が要望されるほどになってきている。サツマイモ産地の農地内で住宅地が増えて混住化が進んでいるところでは、これからはクロルピクリン剤に限らず農薬だけの防除に頼ることが益々困難になると考えられる。

そこで、今後は立枯病に強い本品種の特性を活かして立枯病の発生の多い産地での栽培や本系統を利用した新品種の育成を行うことにより産地の維持発展が期待できると考えられる。

また、「高系14号」や「ベニアズマ」と比較して遅植でも収量が確保され、いもの生育速度が速いことから早

第5表 早掘適性・晩植適性調査成績 (2004年)

定植時期	収穫時期	品種・系統名		
		徳島1号	ベニアズマ	高系14号
上いも重(kg/a)				
5月7日	9月30日	263	195	198
5月17日	10月4日	280	246	164
5月27日	10月14日	233	100	28
6月4日	10月21日	177	135	44

第6表 耐肥性調査成績 (2004年)

施肥量	品種・系統名		
	徳島1号	ベニアズマ	高系14号
上いも重(kg/a)			
標準	280	246	164
多肥	252	306	137
極多肥	319	274	120

第7表 病害抵抗性成績 (1998～2004年)

特性名	試験年度	品種・系統名		
		徳島1号	ベニアズマ	高系14号
立枯病	1998	やや弱	やや強	弱
	1999	やや強	やや強	弱
	2000	やや弱	やや弱	弱
	2001	やや弱	中	弱
	2002	中	中	やや弱
	2003	やや強	やや強	弱
	2004	やや強	やや強	弱
評価		やや強	やや強	弱

注) 達観調査

平成10年度～平成16年度の野菜試験成績書(平成11年度までは徳島県立農業試験場、平成12年度～16年度は農業研究所)の耐病性試験と達観による評価を用いた。

第8表 品質調査成績 (1998～2004年) —蒸しいもの品質—

特性名	試験年度	品種・系統名		
		徳島1号	ベニアズマ	高系14号
肉色	1998	淡黄	—	—
	1999	淡黄	黄	淡黄
	2000	淡黄	黄	淡黄
	2001	淡黄	黄	淡黄
	2002	淡黄	黄	淡黄
	2003	淡黄	黄	淡黄
	2004	淡黄	淡黄	淡黄
	判定		淡黄	黄
肉質	1998	中	—	—
	1999	中	やや粉	中
	2000	やや粉	やや粉	中
	2001	やや粉	やや粉	中
	2002	やや粉	やや粉	中
	2003	やや粉	やや粉	中
	2004	やや粉	中	中
	判定		やや粉	やや粉
繊維の多少	1998	少	—	—
	1999	少	少	少
	2000	なし	なし	なし
	2001	少	なし	なし
	2002	なし	なし	なし
	2003	なし	なし	なし
	2004	少	少	なし
	判定		少	なし～少
食味	1998	やや上	—	—
	1999	やや上	上	やや上
	2000	やや上	やや上	やや上
	2001	やや上	やや上	やや上
	2002	やや上	やや上	やや上
	2003	やや上	やや上	やや上
	2004	やや上	やや上	やや上
	判定		やや上	やや上

掘適性もあると考えられる。耐肥性も高いことから、今後、様々な条件での栽培に活用されることが考えられる。さらに、立枯病、ネコブセンチュウ、ネグサレセンチュウにも抵抗性があることから今後の育種のために交配親としての利用が期待される。

謝 辞

現地適応性試験の実施に当たり、当時の徳島農業改良普及センター鳴門藍住営農室の住友昭文氏、佐原義和氏をはじめとして多くの方々にご協力をいただきました。また、ネコブセンチュウ抵抗性およびネグサレセンチュウ抵抗性の検定については独立行政法人九州沖縄農業研究センター畑作研究部サツマイモ育種研究室の甲斐由美氏にご協力をいただきました。ここに謝意を表します。

摘 要

砂地畑のマルチ栽培に適し、立枯病抵抗性があり、外觀品質に優れ、良食味で多収な青果用サツマイモ品種を育成するためにサツマイモを交配し、得られた実生から選抜し「サツマイモ徳島1号」を育成した。

1 来歴

1996年に徳島県立農業試験場ハウスで「九州112号」を種子親、「高系14号」を花粉親とした交配の後代から選抜した系統である。

2 特性

上いも重が高く、早掘適性、遅植適性、耐肥性が高い特性がある。また、立枯病、ネコブセンチュウ、ネグサレセンチュウにも抵抗性があることから、病害発生している連作地での栽培や交配親としての利用が期待される。

引用文献

- 1) 福西務(1976)：四国地方で多発しはじめた早掘りサツマイモの潰瘍病と防除。今月の農業, 20(8)：76～79.
- 2) 福西務(1977)：土壤燻蒸剤のマルチ畦内消毒による土壤病害防除。徳島農試研報, (15)：33～42.
- 3) 井内美砂・川村泰史(2000)：安定生産のための立枯病抵抗性・高品質サツマイモの育成(2)サツマイモ

立枯病抵抗性の簡易検定等による選抜株の圃場抵抗性検定。平成11年度野菜試験研究成績概要集(公立)－四国－。8～9.

- 4) 井内美砂・川村泰史・小巻克巳(2005)：苗断片および塊根切片を利用したサツマイモ立枯病抵抗性の簡易検定法。育種学研究, 7：45～49.
- 5) 梯 美仁・黒鳥忠司(1999)：サツマイモ栽培における砂地畑土壌の適正粒径組成。徳島農試研報, (35)：20～25.
- 6) 金磯泰雄(1998)：各種資材のサツマイモ立枯病に対する発生抑制効果とこれら資材の併用によるクロロピクリン剤施用量の低減化。徳島農試研報, (34)：14～22.
- 7) 金磯泰雄(1999)：サツマイモ立枯病に対する各種薬剤の防除効果とダズメット粉粒剤の実用性。徳島農試研報, (35)：26～33.
- 8) 金磯泰雄・米本謙悟(1999)：冬期におけるクロロピクリンくん蒸等によるサツマイモ立枯病に対する土壌消毒効果。四国植防, 34：15～24.
- 9) 金磯泰雄・米本謙悟(2003)：でんぶん、米ぬかの土壌(砂土)への施用(混和)による土壌微生物相の変化とサツマイモ立枯病の発生および他の有機質資材の発病抑制効果。徳島農研報, (1)：25～32.
- 10) 金磯泰雄・村井恒治(2007)：砂質土壌の異なる土壌水分下でマルチ畦内処理したクロロピクリン剤のサツマイモ立枯病防除効果と畦内における拡散。徳島農研報, (4)：23～30.
- 11) 川村泰史・吉村健二(2001)：特産農作物の新品種育成(2)サツマイモの系統選抜試験。平成12年度野菜試験研究成績概要集(公立)－四国－。4～5.
- 12) 新居宏延(2001)：培養変異を利用したサツマイモ立枯病抵抗性品種の育成。日作四国支報, 38：72～75.
- 13) 小川 仁・梯 美仁(2003)：徳島県における砂地畑土壌の理化学性の実態。徳島農研報, (1)：7～18.
- 14) 貞野光弘・広田恵介・河本征臣・土屋建一・鈴木孝仁(1991)：徳島県の砂地畑における *Streptomyces ipomoeae* によるサツマイモ立枯病の発生。日植病報, 57：433～434(講要).
- 15) 鈴木孝仁・宮下清貴・工藤和一・鬼木正臣(1986)：*Streptomyces ipomoeae* によるサツマイモ立枯病(新称)。日植病報, 52：505(講要).